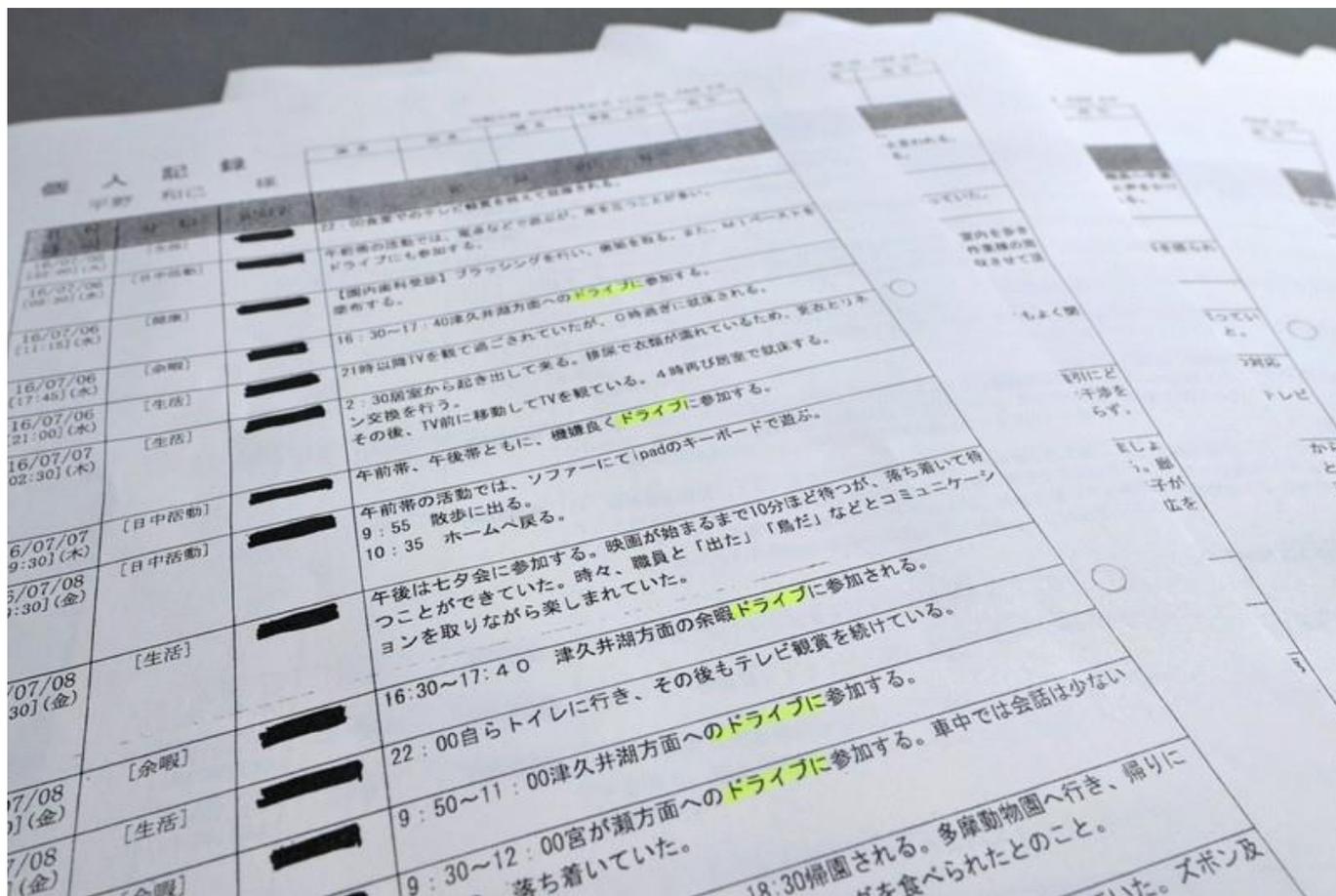


「むしろ楽な仕事だ」という植松死刑囚 その介護の実態とは



平野和己さんの個人記録＝森田剛史撮影

19人の入所者を殺害した津久井やまゆり園（相模原市）の元職員、植松聖死刑囚は事件後、園での仕事について「むしろ楽な仕事だ」と語っている。その言葉をうのみにはできないが、こうした感想が出てくる背景が気になった。元入所者の平野和己（かずき）さん（30）を訪ねて、両親や専門家から園での生活を詳しく聞き、記録を調べると、「むしろ楽」と言われても仕方のない介護の実態が浮かび上がってきた。【上東麻子/統合デジタル取材センター】

横浜市にある廃プラスチックをリサイクルする作業所。屋根の高い、広い作業場で、十数人がスーパーから運ばれてきた発泡スチロール容器のラベルをはがし、次の工程に運ぶ作業をしていた。平野さんも手袋をはめた手でカッターを使い、真剣な表情で丁寧に一つ一つラベルをはがしている。比較的障害の重い人たちが働く作業所（就労継続支援 B 型）だが、なごやかな雰囲気の中でも作業はスピード感があり、福祉というよりは「職場」の雰囲気に近かった。

和己さんは2歳で熱性けいれんを起こして病院に運ばれた。原因は不明だが、1カ月後に退院した時には歩くことも話すこともできなくなっていた。重い知的障害があり、津久井やまゆり園には24歳で入所し約4年過ごした。事件から2年後、津久井やまゆり園を退所し、別の法人が運営する横浜市のグループホームに移った。

現在、この法人が運営する入所施設で暮らしながら、週 5 日、朝 9 時半から午後 5 時まで働き、月に数千円の工賃を得ている。断片的だが言葉を話し、慣れた職員との意思疎通はスムーズに見える。昼食の時も時折、「おいしい」「これなに？」と隣に座った職員に穏やかに話しかけながら、箸を上手に使い完食していた。

日中活動の記録、週 1～3 回だけ

和己さんの父・泰史さん(69)と母・由香美さん(61)によると、やまゆり園にいる時、和己さんは生活介護(日中活動)を受けていた。日中活動とは、障害者総合支援法に基づくサービス。そのうち生活介護では利用者は介護を受けながら創作活動や生産活動をするが、内容の充実度は施設によって大きく異なる。

ほぼ隔週で週末に息子に会いに行っていたが、平日の行動は分からない。事件後の 2017 年末に園から支援記録を取り寄せて驚いた。

2015 年 1 月は和己さんが園にいた平日 19 日中、午前も午後も活動があったのは 0 回、午前か午後にあったのは 5 回だ。16 日間は日中活動がなく、「テレビを見て過ごす」「ゲームをして過ごす」と記されていることが多い。翌年は日中活動の回数は増えている。事件が起きた 2016 年 7 月は事件前日までの平日 16 日間は午前・午後とも活動が記されているのは 9 日、午前・午後いずれかは 7 日(うち 1 日は「起床が遅くグループ活動不参加」と記載)。しかし、活動内容は「ドライブ」がほとんどだ。

泰史さんは職員に理由を尋ねたが、「職員が足りず、予算もないから毎日ではできない。各棟からその日連れていけそうな人をピックアップしている」と説明されたという。

「一日も早く出したい」

両親以外の人との外出経験を積もうと、ヘルパーと出かけた平野和己さん(右)。気に入っているコンパクトカメラを手に、ファインダーをのぞく仕草を楽しそうに繰り返した＝東京都日野市で 2017 年 6 月 23 日、宇多川はるか撮影

他にもおかしいと感じる点があった。面会に行くたびに和己さんが「フケだらけでおしっこくさかった」という。やまゆり園に入所し、この連載でも紹介した吉田壺成さんの母・美香さんも同じような体験をしている。

「能動的に何かをする機会がないまま過ごすうちに無気力になり、体力も失われていく。しかし、これを園では『皆さん穏やかに過ごしている』と言うのです」と泰史さん。



ただ、こうした実態は、実は親も知らないことが多い。保護者会で園は日中活動をきちんとやっていると説明しているからだ。

「親はだれしも、子どもを施設に入れて後ろめたい。他に行く場所がないことも多く、お世話になっているから文句を言いにくい。親も子どもが施設で快適に過ごしていると思いたい。そういう意味では園と親の思惑が一致してしまっているのです」

事件と園での処遇「無関係と思えない」



「津久井やまゆり園」から別の法人の施設に移り、リサイクル施設で働く平野和己さん(右)＝横浜市で
2020年3月12日午後2時48分、上東麻子撮影

両親は、今の施設に移ってからの和己さんの変化に驚いている。

「毎日体を動かしているせいか、体つきががっしりしてきた。前はおぼつかなかったのがまっすぐ歩く。仕事も『こんなことができるんだ』と驚きました。何より表情が豊かになった」と由香美さん。

この法人は「利用者の人生の質を高める仕事を創ること」を方針に掲げている。どんなに障害が重くても施設から出て地域で暮らすこと。パニックを起こした時は職員たちが、和己さんがどこに生きづらさを抱えているのか徹底的に原因を探ることになっている。

泰史さんは「前(やまゆり園)は体を動かしたり、外出したりする機会が少なかったからでしょう。毎週のように施設の外に出て、いろんな人と接する中で脳が活性化しているようだ。何が食べたい、何がしたい、と言うようになってきた」。

一方、事件のことになると表情が暗くなった。

「仕事を始めた頃、障害者はかわいいと言っていた男が、なぜ変わってしまったのか。園で入所者がどう扱われていたかということと事件が、無関係とは思えないのです。ああした風景を見るうちに、彼はもしかして『障害者が生きていることは意味がない』と感じてしまったのかもしれない」

泰史さんは言葉を選びながら「ただ」と続けた。「これはやまゆり園だけの問題ではないと思う。親も施設に入れて安心し、子どもたちの様子を積極的に知ろうとはしなかった部分もあるから」

園長は「大変な人だった」

両親は事件を考える集会などで度々、やまゆり園の支援について疑問を投げかけている。

日中活動は実際行われていたのだろうか。入倉かおる園長は毎日新聞の取材に対し、対象者全員ではなく一部をピックアップしていたとの指摘については「限られた職員でそういう時はある」と認めつつ、「和己さんは(職員が対応するには)大変な人で、彼のことは他の利用者よりも毎日考えていた」と反論する。一方で、日中活動をすれば必ず個人記録には記録していたという。だとすると、他の入所者はもっと日中活動が充実していなかったのではないか。取材に応じた他のやまゆり園職員も日中活動が十分に行われていなかったと証言している。

事業者は日中活動などを提供することで、報酬を得るが、基本的にどんな内容でも収入は事業ごとに同じ。手間ひまをかけるほど人手が取られ、費用もかさむ。

入所施設の支援の実態は、本人と職員にしか分からない。しかし、重度知的障害者がそのことを明確に伝えることは難しい。支援の質を評価することも難しい。「本当に本人が望んでいるのか」という入倉園長の疑問に明確に答えることは難しいだろう。

神奈川県内の別の法人で施設長を長年務めた男性は、「日中活動の質は施設によってばらばら。入所者が高齢であることを言い訳にしたり、職員のスキルが不足していたりするために具体的な活動をせず、ただ利用者を放っておくところも少なくない」と実態を明かす。

「ドライブは職員にとっては楽だが、利用者は座っているだけ。少しでも能動的な活動ができるように工夫しないといけない」と話す。そしてこう投げかける。

「本当の問題は、障害者がどんな生きがいを持てるのかを問わず、ただ施設に入れておけばいいと社会全体が考えていることではないでしょうか？」

植松死刑囚から見た支援の仕事

これまで津久井やまゆり園を出た3人のケースを見てきた。

由美さんは車椅子に長時間拘束されていた生活から、自分の足で歩き、地域のコミュニティーの一員として、団地の古紙回収もする。住まいは家庭的なグループホームだ。

「何もできない子」だと思われていた吉田吉成さんは、週5日、支援を受けながらリサイクル工場で働いている。

和己さんを含めた3人の生活は園を出て大きく変わった。

植松死刑囚は、支援の仕事はどうみていたのか。

月刊誌「創」の篠田博之編集長との接見で、津久井やまゆり園での仕事について問われた植松死刑囚は、「むしろ楽な仕事だ」と答えている。

労働条件や待遇には不満はなく、「例えば『見守り』という仕事があるのですが、本当に見ているだけですから」、言うことを聞かない障害者には「暴れた時は押さえつけるだけですから」と話している。

「ただ彼らを見ているうちに、生きている意味があるのかと思うようになったのです。それは現実を見ていればわかることだと思います」

社会保障法の観点から事件の調査を行っている愛媛大学の鈴木静教授はこの点に着目し、こう指摘する。

「本来、見守りは利用者の意思やペース、自主性を尊重し、自傷他害を防ぐ目的で行われるもので高度な専門性を求められる。『ただ見ているだけ』からは、専門性のかげりもない働き方がみてとれる。彼(植松死刑囚)が曲がりなりにも仕事ができたとすれば、津久井やまゆり園のケアには問題があったと言わざるを得ない」